

二 特集二

自閉症の特性に応じた教育課程の在り方に関する考察

－我が国における知的障害養護学校の実践とイギリスにおける取組からの考察－

徳永豊*・木村宣孝**

(*企画部) (**教育支援研究部)

要旨：プロジェクト研究「養護学校等における自閉症を併せ有する幼児児童生徒の特性に応じた教育的支援に関する研究」の成果を踏まえつつ、自閉症の特性に応じた教育課程の在り方について検討することを目的とした。我が国における自閉症の特性に応じた学校教育の現状と課題を整理し、これまで実践されている自閉症の特性に応じた教育課程とその成果及び提言をまとめた。そこでは、自閉症の特性に応じた自立活動の指導内容の整理と領域・教科を合わせた指導形態が共通の課題となっていた。さらに、イギリスの自閉症学校（自閉症協会）の教育課程について検討し、「学習することを学ぶ」こと、「学習することを可能とする」ためのスキルが重視されていた。また、学びやすさや般化を目指した「統合した指導」等が取り上げられていた。これらの検討を踏まえ、①教育課程の在り方、②指導内容と指導形態について、③子どもの学びの基本と個別の指導計画の改善、が重要な検討課題であることを指摘した。

見出し語：自閉症、教育課程、自立活動、領域・教科を合わせた指導、個人別の課題学習

I. はじめに

平成17年12月に示された「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」では、「知的障害と自閉症を併せ有する幼児児童生徒に対し、この2つの障害の違いを考慮しつつ、障害の特性に応じた対応について、引き続き研究を進める必要がある。」とされている¹³⁾。それ以前に示された「21世紀の特殊教育の在り方について（最終報告）」¹⁾等においても、知的障害養護学校等における自閉症の児童生徒の教育を充実させることが重要な課題として指摘されている。

本稿では、プロジェクト研究「養護学校等における自閉症を併せ有する幼児児童生徒の特性に応じた教育的支援に関する研究」の成果を踏まえつつ、自閉症の特性に応じた教育課程の在り方について検討することを目的とする。

具体的には、まず、自閉症の特性に応じた学校教育の現状と課題を整理し、我が国で実践されている

自閉症の特性に応じた教育課程とその成果及び提言をまとめる。さらに、イギリスの自閉症学校（自閉症協会）の教育課程について検討し、自閉症の特性に応じた教育課程の基本と今後の課題について考察する。

II. 自閉症の特性に応じた学校教育の現状と課題

D S M-IVの自閉性障害、いわゆる自閉症とは、①対人的相互反応における質的な障害、②意志伝達の質的な障害、③強いこだわりや固執行動・常同行動、の3つの行動特徴を併せもつ一種の症候群と定義される。これらの行動特徴は、個人差があり、発達レベルや年齢と共に大きく変化することもあり、この他にも、感覚知覚の過敏性や特異な認知的な特性があるとされている。

1. 盲・聾・養護学校における自閉症の児童生徒

自閉症で明らかな知的障害を併せ有する児童生徒

の多くは、知的障害養護学校においてその教育を受けている。国立特殊教育総合研究所（2005）が全国の盲・聾・養護学校を対象に自閉症教育に関するアンケート調査を実施した結果からは、全国の盲・聾・養護学校で「自閉症の診断のある幼児児童生徒」の割合は全体の約15%程度、「自閉症の可能性のある幼児児童生徒」を含めた割合は推計で約25%程度であるとされている。また、全国の知的障害養護学校に在籍する自閉症の診断のある、又は可能性のある幼児児童生徒は、小学部で47.5%、中学部で40.8%と非常に高い割合が示されている⁵⁾。

2. 特性に応じた指導について

このように高い割合を示す自閉症の児童生徒に、その特性に応じた指導を学部全体として取り組んでいる割合は、それぞれ小学部は24%、中学部は26%、高等部は18%と高くない⁵⁾。自閉症の特性を理解しつつ、その特性に応じた組織としての専門性を高め、教職員の連携による指導を展開することの重要性が強調されている⁸⁾。

3. 知的障害養護学校の教育課程の現状と課題

知的障害養護学校の教育課程は、学校教育法施行規則及び学習指導要領によって、各教科、道徳、特別活動、自立活動及び総合的な学習の時間（小学部を除く）によって編成するものとされている。実際の授業としては、児童生徒の生活に結びつけながら実際的な状況下で体験的に学習するための効果的な指導の形態である「日常生活の指導」「生活単元学習」等の領域・教科を合わせた指導等が行われている。

一方、前に述べたように知的障害養護学校において、自閉症の児童生徒の占める割合が高くなってきている。しかしながら、知的障害養護学校では、一般的に自閉症の特性は考慮されることが少なく、知的障害のみの児童生徒と同様な指導内容や指導方法が自閉症の児童生徒に実施されてきた。また、自閉症について個々の特性を検討することなく、知的障害の児童生徒と一緒に集団で指導してきた経緯がある。

知的障害を併せ有する自閉症とは、自閉症を併せ

有する知的障害として理解するのではなく、知的障害を併せ有するDSM-IVの3つの行動特徴、感覚過敏、特異な認知発達等を示す自閉症として理解し、その指導方法や指導内容を工夫することが重要であるとされている⁹⁾。

さらに、知的障害養護学校の教育課程と自閉症の特性に応じた指導については、以下の点が指摘されている⁹⁾。

- (1) 知的障害養護学校の各教科として指導内容が整理されているが、基本的には領域・教科を合わせた指導が展開されている。
- (2) 知的障害養護学校においては、自立活動の指導の積み重ねが少なく、自立活動の指導、自立活動の時間における指導の位置づけが曖昧である。
- (3) 知的障害養護学校の各教科でなく、「生きる力」や「自立していく力」の観点から、指導内容を領域に分け整理する試みがある。
- (4) 教育課程の整理に加えて、個別の指導計画を作成することが定着してきているが、学校ごとでその取扱に違いが生じている。
- (5) 児童生徒個々の実態に応じた目標設定、評価のサイクルの考え方が普及して、個別的な対応が必要となっている。

このような現状を踏まえ、知的障害養護学校における自閉症の特性に応じた指導が充実するためには、①自閉症の行動特性を考慮する、②指導内容や方法の再整理、③組織としての専門性の確保、④実践によって蓄積された経験を記述し、知識としてまとめ、関係者間で共有することが必要である。

ここでは、教育課程の在り方を検討することによって、学校の教育課程の基準である学習指導要領への提言や学校の教育課程を編成する際の配慮事項について考察する。

Ⅲ. 我が国の自閉症の特性に応じた教育課程に関する実践と提言

本項では、我が国における自閉症の特性に応じた教育課程に関する研究を概観する。

1. 自閉症の特性に応じて必要となる教育内容について (文部科学省研究開発学校における教育課程研究から)

1) 鳴門教育大学附属養護学校(平成13～15年度)

鳴門教育大学附属養護学校は、自閉症の児童生徒の障害特性に応じた指導内容や方法を明らかにするため、「自閉症の障害特性に応じた自立活動の内容・方法の考察」、「獲得した行動の般化を促進すること」、「教育内容・方法の一貫性をはかること」の三つの観点から「自閉症の指導プログラム」について検討を行った。自閉症の障害特性に応じた指導内容・方法に関しては、自閉症の特性に対応する指導内容を自立活動の5区分22項目との関係において整理し、「自閉症自立活動内容表」を作成した¹⁰⁾。この中で、自閉症の障害特性として特徴的な「社会性の障害」に対応する指導内容を「社会とのかかわり」(内容項目として、「社会生活を送る上で必要となる能力に関すること」、「社会生活上のルールに関する理解に関すること」)を設定し、新区分として提言している。また、「自閉症自立活動内容表」では、他の区分・項目においても、自閉症の特性との関連や必要となる指導内容(考え方や例)を具体的に記載している。

さらに、行動の般化を促進するために、個別の指導計画に「行動形成シート」及び「行動修正シート」を位置づけ、これらの有効性の分析のもと「指導計画立案シート」及び「目標設定シート」へと改善を図り、これらの指導計画作成・実施・評価手続きが、様々な情報の収集と教師間の共通理解の促進、目標の一貫性の確保、般化場面を意図した目標設定、標的行動の具体化などに効果が認められたことを挙げている。

2) 筑波大学附属久里浜養護学校(平成16～18年度)

筑波大学附属久里浜養護学校は、平成16年度から知的障害を伴う自閉症児の教育内容・方法等の研究開発を行うために設置された学校である。

研究開発学校として平成16～18年度の3か年の教育課程開発研究に取り組んでいるが、研究の2年次までの成果として、自閉症の障害特性に応じた自立活動の内容の整理と再編成を行っている。

自立活動の内容検討に当たって、便宜的に、現行の5区分22項目を「自立活動A」、自閉症の障害特性に応じた自立活動の内容を「自立活動B」とし、幼

児児童個々の実践記録カードの蓄積及び分析を行い、区分及び内容の整理を行った。その結果、自閉症の児童生徒を教育する場合の自立活動の区分及び内容として、第2区分「心理的な安定」を「心理的適応」に、第3区分「環境の把握」に「(5)危険な状況の認知と回避に関すること」を付け加え、新区分として「6 社会的適応」(新項目「日常生活における円滑な活動の遂行に関すること」、「日常生活における感覚の特性を理解した適切な対応に関すること」の2項目)及び「7 自律的活動」(新項目「身近な人への支援の依頼に関すること」、「自己の心情の理解と対応に関すること」、「生活に必要な計画と遂行に関すること」の3項目)を提言している^{16) 17)}。

これらの新区分・項目については「養護学校における知的障害を伴う自閉症児を教育する場合の自立活動の目標と内容の解説」として整理され、28項目のそれぞれについて自閉症の特性に即した具体的な指導内容や配慮事項等を解説している。

また、指導に当たって「自立活動の時間における指導」が有効であるという仮説のもと、自閉症の特性に応じた内容に焦点をあてて指導する「自立活動の指導の時間」(「のびのびタイム」など)の時間設定を行い、実践研究を行っている。その検証方法と効果及び提案した自立活動の内容の検証については今後の課題としている。

3) 千葉県立野田養護学校(平成15～17年度)²⁾

千葉県立野田養護学校では、養護学校の総合化を視野に入れ、自閉性障害、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由等、多様な障害のある児童生徒の教育的ニーズに対応するための教育課程編成について検討している。障害種の異なる児童生徒とともに学習することを念頭におきながら、その教育的ニーズを明らかにするために、自閉性障害のある児童生徒への取組として「自閉性障害に特化した自立活動」を試案として設定している。

一方、今後の課題として、個別の指導計画における自立活動の指導・支援内容の表記方法、自立や社会参加の視点からの自立活動の内容の吟味、評価方法の検討、個々の項目の関連性を総合的にとらえる視点の検討等が必要であるとしている。

2. 自閉症の特性に応じた効果的な指導の形態について (国立特殊教育総合研究所プロジェクト研究協力校の実践から)

1) 富山大学人間発達科学部附属養護学校⁸⁾

富山大学人間発達科学部附属養護学校では、児童生徒一人一人に設定される課題を児童生徒自らが主体的に実現するための指導の形態として「チャレンジタイム」を設定している。「チャレンジタイム」は、教育課程上自立活動に位置づけているが、取り扱う個々の課題には各教科、領域の内容が多様に含まれ、生活で活用していくことを重視している。これは、領域・教科を合わせた指導としての特徴を有する指導の形態として捉えることも可能である。

個々に設定される指導目標・内容を、子どもの主体的・自立的活動として展開する上で、「支援ツール」と名付けられている活動支援方法が一人一人に具体化され、指導の効果が実践的に検証されている。

「チャレンジタイム」の時間設定は、障害の状態にかかわらず、すべての児童生徒にとって必要な指導の形態として教育課程に位置づけられているが、個々のニーズを起点とした学習活動を行う授業の特徴から、自閉症児にとっても有効な指導の形態と考えられる。

2) 筑波大学附属久里浜養護学校

研究開発学校としての教育内容の研究成果については先に触れたが、効果的な指導の形態の在り方に関する実践としていくつかのタイプの授業づくりを試みている。

研究の2年次の取組としては、個々の自立活動及び各教科(こくご・さんすう)の個別課題を個別指導の形態で指導する「個別の課題学習」と、個々の自立活動の目標を集団において指導する「のびのびタイム」の指導の形態において実践研究を展開している。また、研究の3年次には、自閉症の障害特性に応じた自立活動の内容として提言した区分・項目を指導する「社会生活の学習」としての試みが行われている。「のびのびタイム」や「社会生活の学習」は、生活への般化の観点から各教科の内容を含めた指導として行われていることから、これらの指導についても領域・教科を合わせた指導として捉えることも可能である。

研究の2年次に行われた自閉症教育実践研究協議会(2006)¹⁶⁾において、個々の課題について個別指導の形態で重点的に指導し、そこで学習した内容を集団活動の場で生かす指導の事例が報告されており、教育課程の在り方を検討するための実践的成果として活用されることが期待される。

3) 北海道教育大学附属養護学校⁸⁾

北海道教育大学附属養護学校では、児童生徒一人一人の課題に対応する時間として「課題学習」の時間を設けている。この時間では、児童生徒個々の自閉症の特性を考慮し、まず一対一の個別指導を前提に指導を展開し、この指導で培った学習態度、意欲、知識・技術等を次の指導段階である小グループでの学習展開の流れによって指導を行っている。

自閉症児の場合、個別指導が必要で小グループへの適応に個々で違いがあるため、この取組は個別の課題への対応と般化としての集団活動への広がり工夫した授業づくりであると考えられる。

また、自閉症の特性と集団活動への参加のための支援を基本として、「体育」(又は「音楽」)の内容を合わせて指導する時間として「きりのめタイム」の時間を設けている。

さらに、各教科、領域の内容を、自閉症の特性に応じた指導内容のまとまりを「くらし」「しごと」「よか」「生きる力に関する指導内容」として再整理し、教育課程上の位置づけについて検討を行っている。

3. 東京都の提言とその実践¹⁵⁾

東京都は平成18年3月に「自閉症の児童・生徒のための教育課程の編成について」を報告している。ここでは、自閉症の特性を配慮した指導内容について、「社会性の学習」「般化の学習」「認知の学習」「自立活動」として整理し、領域・教科を合わせた新たな指導の形態としての「社会性の学習」を設定し、「般化の学習」「認知の学習」は、各教科・領域等の指導内容として取り扱うとしている。

なお、「社会性の学習」の適用に当たっては、知的障害養護学校の普通学級の教育課程は一つとし、自閉症に対応した教育課程を編成する場合は、自閉症ではない児童生徒についても同様に指導することとしている。

平成18年度に東京都立青鳥養護学校久我山分校(小・中学部)は、次のような教育課程を編成している¹⁸⁾。学校の教育課程は、普通学級の教育課程と重度重複学級の教育課程の二種類である。自閉症に対応した小・中学部の普通学級の教育課程では、新たに領域・教科を合わせた指導の形態として「社会性の学習」を設定している。小学部では1単位時間(週45分)で、中学部では1.2単位時間(週60分)を設定し、ソーシャルスキルや対人関係のスキルを身につける学習として位置づけている。

4. 国立特殊教育総合研究所の提言

国立特殊教育総合研究所(2006)⁹⁾は、平成17年度に実施した「NISE自閉症教育実践セミナー」において、自閉症の特性に応じた教育課程の在り方として、次の点を指摘している。

- (1) 「知的障害」と「自閉症」は異なる障害として区別し、その特性に応じて指導内容・指導形態を検討することが必要である。
- (2) 自立活動は重要な領域であり、表1に示す特性に対応した指導目標とその内容を検討した。その結果、自閉症の特性に応じた「偏ったコミュニケーション」「常同・こだわり行動」等の目標や内容が挙げられたが、従来の5区分に分類できるものがほとんどであった。自立活動の指導目標として「社会性」に関するものはあげられなかったが、「社会性」については、各教科、領域に示されている内容との関連で検討する必要がある。

表1 自閉症の特性(項目だけ抜粋)⁹⁾

<ol style="list-style-type: none"> 1. 対人的相互反応における質的障害(特異な社会性の発達) 2. 意思伝達の質的障害(偏ったコミュニケーション) 3. 行動、興味、活動が限定、常同的で反復的(常同行動、こだわり行動) 4. 感覚刺激への異常な反応、感覚過敏 5. 想像性の欠如(遊びや行動の広がりなさ) 6. 飲食や睡眠等の異常(偏食、異食や睡眠の乱れ) 7. 姿勢・運動の異常(独特な姿勢、指先の作業の困難さ) 8. 特異な認知特性(視覚的情報処理、シングルフォーカス)

- (3) 自閉症の特性に応じた効果的な指導の形態として、自立活動の指導を核とし、各教科等の内容を関連づけて授業を構成する「個人別の課題学習」(仮称)を領域・教科を合わせた指導として教育課程に位置づける、等である。

この「個人別の課題学習」の位置づけについては、図1に示した。「個人別の課題学習」としては、筑波大学附属久里浜養護学校で取り組まれている「個別の課題」や「のびのびタイム」、北海道教育大学附属養護学校で取り組まれている「課題学習」、富山大学教育学部附属養護学校で取り組まれている「チャレンジタイム」等が、その基本イメージとされている。

5. まとめとして

これらの研究及び実践から、自閉症の特性に応じた教育課程を検討するにあたり、第1に自立活動の視点から自閉症の特性に対応する指導内容を明確にし、個に応じて具体化すること、第2に、自閉症の特性に対応する効果的な指導方法(指導の形態)を明らかにすることの2点について検討することが必要である。

1) 自立活動の内容の検討

自閉症の特性に対応する指導内容を明確にする研究については、文部科学省研究開発学校の取組にみられるように、自立活動の指導内容を自閉症の特性に応じて具体化し、再整理することに焦点が当てられている。その中でも、3校共通して提言している内容として「社会性」に関する項目が挙げられる。

自立活動の内容は、人間としての基本的な行動を遂行するために必要な要素と、障害に基づく種々の困難を改善・克服するために必要な要素を五つの区分に分類・整理したものとされている。人間としての基本的な行動を遂行するための要素を自閉症の障害特性から考えると、社会や集団における諸活動で、通常、他者とのかわりにおいて自然に獲得されていくことが想定される対人認識や社会的な行動規範の学習については、自閉症児の場合、特別な指導が必要であると言えることができる。

一方で、研究開発学校が提言している社会性に関する内容項目をみると、社会生活に必要なとなる諸能

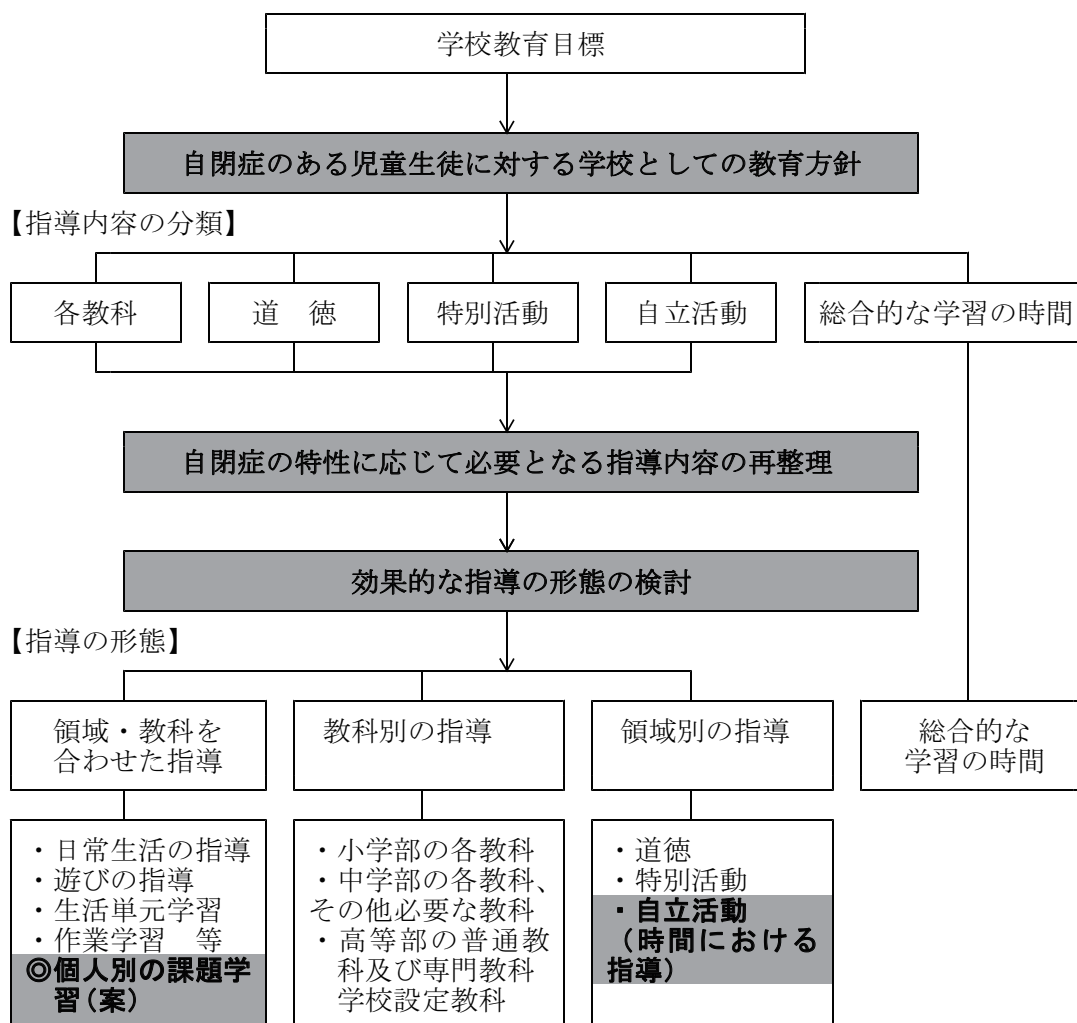


図1 自閉症の特性に応じた教育課程編成の構造(案)
(知的障害養護学校の場合)⁹⁾

力の育成やスキルの獲得、日常生活における行動の遂行、自己の心情の理解、職業的活動や余暇活動など、自立活動における内容、各教科・領域の内容と重なり合うと考えられる項目が含まれている。これらのことから、自閉症と特性に応じて必要となる内容を、自立活動及び各教科、道徳、特別活動全体の内容との関連で整理することが必要であろう。

また、北海道教育大学附属養護学校が検討しているように、各教科・領域の内容を、自閉症の特性に応じて再整理する取組(「くらし」「しごと」「よか」「生きる力に関する指導」等)もあり、今後はこのような考え方も含め検討が必要であろう。

2) 効果的な指導の形態の在り方の検討

自閉症の教育課程を検討する上で必要となるもう

一つの点は、効果的な指導の形態の開発である。

領域・教科を合わせた指導は、学校教育法施行規則第73条の11第2項において、知的障害者の授業を行う際の特例として規定されているものである。知的障害教育においては、知的障害の学習上の特性を踏まえ、各教科及び領域の内容を児童生徒の生活に結びつけながら実際の状況下で体験的に学習するための効果的な指導の形態であり、一般的には「日常生活の指導」「生活単元学習」「遊びの指導」「作業学習」などが行われている。

知的障害を併せ有する(知的発達の遅れを伴う)自閉症児の場合においても、学習内容の般化の視点から各教科等の内容を関連づけ、生活上の諸課題に密着した学習活動を行う必要性が考えられることか

ら、領域・教科を合わせた指導は効果的な指導の形態の一つとして考えられる。

自閉症の特性に応じた指導の形態の開発研究としては、国立特殊教育総合研究所が提言している「個人別の課題学習（仮称）」や東京都が提言している「社会性の学習」があり、これらは領域・教科を合わせた指導として位置づけられている。

教育課程上の位置づけを検討するに当たっては、この指導がどのようなコンセプトを有する指導なのかを明確にする必要がある。東京都が提言した「社会性の学習」では、対人関係のとり方やソーシャルスキルを身に付けることを重点的に取扱う形態であるとし、国立特殊教育総合研究所が提言した「個人別の課題学習」では、自立活動の指導を核とし、集団活動を前提とせず各教科等の内容を生活的に取扱う形態であるとしており、領域・教科を合わせた指導の特例を用いた指導である点で共通しているが、指導の形態のコンセプトには、視点の当て方の違いもみられる。

今後、このタイプの指導が一般化するためには、個々の自閉症の特性に応じた指導目標・内容を具体化し、学習形態としての個別指導や小集団による指導などの集団構成、単元・題材等の学習活動のまとめ、学習環境への十分な配慮等を踏まえた指導計画の作成が必要となる。これらの個のニーズを起点とした指導計画とその指導上の効果については、これから実践的検証が行われようとしている段階であり、今後、授業としての具体化と実践に基づいた分析が必要であろう。

IV. イギリスの自閉症学校（自閉症協会）の教育課程から

イギリスにおける自閉症の特性に応じた教育を提供している代表的な組織のひとつに自閉症協会（The National Autistic Society）がある。この自閉症協会は、自閉症の教育として、その基本理念に表2に示すようなSPELLを掲げ、6つの学校を運営している¹²⁾。

それぞれの学校は、子どもの年齢や寄宿舎等の有無に違いがある。ここでは、養護学校の小学部に

おける教育課程を検討するために、小学部の子どもを対象とするラドレット・ロッジ学校（Radlett Lodge School）とヘレン・アリソン学校（Helen Allison School）を取り上げ、その教育課程について検討する。

1. 特別学校における教育課程の基本構造について

自閉症学校は、特別学校（special school）の位置づけであり、その教育課程を考える場合に、イギリスにおける特別学校の教育課程がその基本になる。イギリスにおける特別学校を含めた特殊教育の教育課程については、教育の目標、及びナショナル・カリキュラム（国で定められた教育課程の基準）があり、特別学校においても通常学校と同じとされている（国立特殊教育総合研究所、2004⁷⁾）。英語、算数、科学等の教科を基本として、個別の指導計画（Individual Education Plans）により、個々の特別な教育的ニーズに応じた教育が展開されている。ナショナル・カリキュラムを適用しない場合の条件とその手続きが規定されているが、可能な限りはナショナル・カリキュラムに従うことが求められている¹⁴⁾。

2. ラドレット・ロッジ学校とその教育課程について

3歳から11歳の自閉症の子どもの学校であり、2005年1月で、49人が7学級に在籍していた。寄宿舎があり、在籍者の内の14名が活用していた。1教室で、子ども6名と教職員3名（教師1名、介助員2名）が基本的な学級の構成であった¹¹⁾。

1) 学校のカリキュラム

学校要覧には学校のカリキュラムについて、以下のような記述がある。学校のカリキュラムとしては、「コミュニケーション」と「社会スキル」を重視し、個別の指導計画を基本に、通常の学校での教育内容と関連性を保ちながら、適切な範囲で、ナショナル・カリキュラムの内容を指導する。

小学部段階においてすべての生徒は、ナショナル・カリキュラムに従う。しかしながら、それらの内容を学ぶ前に、「学ぶことを学ぶツール（learning to learn tools）」を身につけることが必要である。「期待されていることを知る（what is expected of

表2 SPELLの枠組み¹⁾

<p>SPELLの枠組みは、英国自閉症協会のすべての学校、または成人用施設において使用されている。この枠組みは、自閉性障害のある人々の個々のニーズに応じるものであり、これにより彼らの生活が継続的に秩序だったものとなる。</p> <p>構造化 (Structure) は、思わぬことや予測できない出来事への恐怖を取り除き軽減する。それにより、環境が安心できるものになり、学習しやすいものになる。構造化は、不安感を低減させる強力な手段である。そして、構造化は、効果的なコミュニケーションにも役立つ。彼らの混乱した世界を解消する手助けになる。</p> <p>肯定的な (Positive) な姿勢と将来に適切な見通しを持てること (Positive Attitudes and appropriate expectation) で、子どものやる気と物事ができる環境が確保される。そのような環境では、自らの強さ (strengths) を確かなものとするのが可能で、自信と自尊心を高めることができる。教育プログラムは、パターン化することを避け、個人としての自律性が高まるような、小さな変化を含むように計画することが大切である。</p> <p>一人一人の独特な視点から見た世界を大事にし、他者の物の見方を理解するように努めるために、共感 (Empathy) が求められる。共感には、個人の興味や好み、動機、恐怖心、特異性を理解することが含まれ、自閉性障害の体験を共有することにつながる。</p> <p>低刺激 (Low arousal) アプローチによって、生活環境や学習環境に関して、嫌な刺激や戸惑いを生じさせる刺激を少なくし、他の好ましくない刺激がない状況に調整し、リラックスを高め緊張感を低減させるように努める。静かで穏やか環境で、物事に集中できるアプローチは、学習の効果を最大限にし、不安を軽減させる。</p> <p>このアプローチは本質的に、無理をさせない方法である。しかしながら、適切に援助されながら繰り返し刺激を経験することを通して、嫌悪を感じるような新しい体験にも挑戦していくよう励まされる。そうすることで、柔軟性を向上させ、発達や自立を促進させることができる。</p> <p>家庭、学校、そして他のサービス提供者等のすべてのレベルで、効果的な連携 (Links) を築くことは、きわめて重要である。社会的なインクルージョンの機会を最大限にするためにも、このアプローチに関して高い一貫性をもって実践することが重要である。</p>
--

them)」「異なる社会状況でどのように行動するか (how to behave in different social situations)」を学ぶことが必要である。

入学した生徒は、「わずかの時間いすに座る」「短い時間課題に注意を向ける」「他者の接近に我慢する」などの基本的なスキルを学習する必要がある。多くの生徒たちは、基本的日常生活スキルに関して、固定的なルーチン (rigid routines) を身につけてきている。初期の段階で、これを解決 (tackle) しないと、学習する環境にアクセスすることに関して、自分で壁をつくり (entrench), 厳しく拒否する可能性がある。

自閉症の生徒は、年齢を重ねる中で、自然に日常生活のスキルを拾い上げ (pick up), 日常化 (generalise) することが難しい。だから、職員は

生徒たちが学ぶことが可能なように、体系的な一定 (systematic and consistent) の教授戦略 (teaching strategies) を活用 (employ) する。特別なルール (specific rules) を教えることで、「期待されていることを理解し」たり、「より適切なルーチンを身につけ」たりすることができる。

2) 授業展開上の工夫

生徒が教科等の内容を学ぶには、特異な方法が必要である。例えば、カリキュラムの内容を学ぶために、学校の学習全体を通して、単純な基本スキルを教えること、さらに、行動形成や社会的コミュニケーション、意図、アドボカシー、レジャー等に関する個々の目標を設定し、自閉症の3つ組に対応する手立てを準備する等である。

ナショナル・カリキュラムの内容を学びやすい

ように、統合した指導 (Integrated Schemes of Work, Briars 1990) を活用する。その際の出発点は「科学」(Science) である。通常教育のように、3学期制で、その内容を決める。科学、技術、地理、芸術の要素も混ぜながら、合わせた指導を展開し、ナショナル・カリキュラムにある内容を学習する。英語や算数の内容は特異的であり、高度に構造化した形式で教える必要がある。これらの領域についての生徒の能力は幅が大きく、個々に特異な強さの違いがある。よって、授業は個々の違いを基本的に、個々の生徒のニーズに応じることが求められる。

自閉症の生徒は学習を異なる状況で般化することが難しい、限定された状況でのみ活用可能である。それゆえ、統合した指導は学んだ内容について教科を越えて、様々な状況で活用する機会を提供する。このように、活動につながりを持たせ、関連する課題に取り組むことで、共通のタイトルやテーマとして、学んだことを生活において活用できる点が重要とされている。

3. ヘレン・アリソン学校とその教育課程について

1968年に開校された学校であり、5歳から19歳の自閉症の子どもの学校である。2005年1月で、70人が8学級と継続教育施設(3グループ)に在籍していた。寄宿舎が4か所にあり、28名の子どもが活用していた⁴⁾。

1) 学校のカリキュラム

自閉症の子どもの個々のニーズに応じた幅広い、バランスのいいカリキュラムを提供している。ナショナル・カリキュラムに従うよう努力しているが、それは生徒が必要としているカリキュラムの一部であると理解している。自閉症の子どもは、ナショナル・カリキュラムにアクセスするために、異なるスキルを身につけることが必要である。多様なカリキュラムの内容は、個別のプログラムに基づき、1対1の形態で指導を展開している。

カリキュラムの領域としては、英語、算数、科学、デザイン技術、地理、歴史、体育、音楽、外国語、芸術、情報技術、宗教教育である。個人・社会・健康教育(Personal, social and health education;

PSHE) が重要であり、性教育は健康教育に含まれる。キャリア・ガイダンスは、移行の段階で実施される。

2) 特性に応じた工夫

生徒は自閉症の診断があり、学習における困難さを示している。学習した内容を他の場面で活用する般化が難しく、カリキュラムの内容を全て学ぶには、モチベーションが限定されていて、内容を選択する必要がある。

社会的及びコミュニケーション・スキルを学び、学校の内外、コミュニティにおいて適切に行動する仕方を学ぶ。可能な限り幅広くスキルを身につけ、興味を広げる。そして、新しい体験を増やし、世界を広げることが必要である。社会的に適切に行動することを学ぶことは、社会的インクルージョンを進め、自立を高める上でも重要である。

4. イギリスの自閉症学校の教育課程からの考察

自閉症の特性に応じた養護学校の小学部における教育課程を検討するために、イギリスの自閉症協会が運営する学校の教育課程を取り上げた。ここでは、その特徴をまとめるとともに、我が国の自閉症の特性に応じた教育課程の在り方への示唆を検討する。

1) ナショナル・カリキュラムとその運用

イギリスにおける特別学校の教育課程に関して、教育の目標、及びナショナル・カリキュラム(国で定められた教育課程の基準)は、特別学校においても通常学校と同じとされている。自閉症協会の学校においても、英語、算数、科学等の教科を基本として、個別の指導計画(Individual Education Plans)により、個々の特別な教育的にニーズに応じた教育が展開されていた。そこではコミュニケーションや社会スキル等の指導が実施され、適切にその内容が編成されていた。

ナショナル・カリキュラムに従いつつ、ラドレット・ロッジ学校では、「期待されていることを知る」等の「学習することを学ぶ」ツールを身につけることが重視されていた。

これに関連するものとして、著しく学習の困難が大きい子どもにとっての、学習の基盤となるスキル

であるキー・スキル (key skill：コミュニケーションスキル、ICTスキル等) や「学習することを可能とする」ためのスキル (enable skill：感覚・探索スキル、知覚スキル、思考スキル等) が提案されている³⁾。学校における学習内容について、このように整理することの有効性について検討する必要がある。

これらの内容については、我が国の自立活動の内容にあたるものと考えられ、自立活動の内容を整理する上で参考となろう。今後は、自閉症の特性に応じた内容をこれらの項目として整理できるのかについて検討する必要がある。また、「自然に日常生活のスキルを拾い上げ (pick up)、日常化 (generalise) することはない」との指摘は重要である。これらの点は国立特殊教育総合研究所が提案している「自閉症教育のキーポイント」⁹⁾ の「学習する態勢になる力」「指示に応じる、指示どおりに行う力」等との関連性についても検討する必要がある。

2) 自閉症の特性に応じたまとめとして

自閉症の特性に応じたまとめとして、我が国の実践では、「社会性」や「般化」、またイギリスの実践では「コミュニケーション・スキル」「社会スキル」「行動管理」「モチベーション」「般化」等が取り上げられていた。特に「社会性」の行動要素にどのようなものが考えられるかの整理が必要である。

これらは、自閉症の特異的な障害から、想定される学習内容と考えられる。これらの指導の内容とナショナル・カリキュラム及びその基本となるスキル等の内容がどのような関係にあるかの整理も必要である。

3) 授業展開の工夫として

学習形態について、ラドレット・ロッジ学校では、学びやすい工夫として、「統合した指導 (Integrated Schemes of Work)」が重視されていた。他の自閉症協会の学校であるロベルト・オーガン学校 (The Robert Odgen School) においては、キー・スキルは中心的 (central) なものであり、また学校の教育課程の統合された部分 (integral part) であり、それらは、「教科等を統合した学習 (cross-curricula approach)」として授業が展開されている¹²⁾。

その「統合した指導」の出発点は「科学」(Science) とされていて、我が国では知的障害養護学校の「生活科」と類似する内容と考えられる。単に学びやすさだけでなく、般化の難しさを考慮すれば適切な授業展開の工夫と考えられる。

V. 教育課程の基本として

Ⅲにおいて自閉症の特性に応じた学校教育の現状と課題を整理し、我が国で実践されている自閉症の特性に応じた教育課程とその成果及び提言を検討した。そこでは、自閉症の特性に応じた自立活動の指導内容の整理と「社会性」に関する内容の必要性及び領域・教科を合わせた指導の形態の活用が共通の課題となっていた。さらに、Ⅳにおいてイギリスの自閉症学校の教育課程について検討し、「学習することを学ぶ」こと、「学習することを可能とする」ためのスキルが重視され、学びやすさや般化を目指した「統合した指導」等が取り上げられていた。

ここでは、これらの比較検討をもとに、自閉症の特性に応じた教育課程の基本的な視点について考察する。

1. 自閉症の特性に応じるとは

イギリスにおける特別学校の教育課程について、教育の目標、及びナショナル・カリキュラムは、特別学校においても通常学校と同じとされている。

今後の教育課程の在り方について、国立特殊教育総合研究所 (2004b)⁶⁾ は、イギリス等の海外の教育課程を比較検討しつつ、障害の枠を越えた教育課程の在り方を提案している。このような動向を踏まえながら、自閉症の特性に応じた教育課程について、基本的には小・中学校の教育課程に準拠することを前提に、特性に応じた学校の教育課程編成上の工夫をどう行うかという視点が重要であろう。また、知的障害養護学校の教育課程と小・中学校の教育課程との連続性について整理することが今後の課題であろう。

2. 自立活動の内容の整理

我が国における自閉症の特性に応じた教育課程に

関する研究を整理すると、自立活動の指導内容を自閉症の特性に応じて具体化し、再整理する取組が示めされた。イギリスの学校では、自閉症の特性に応じた内容として「コミュニケーション・スキル」「社会スキル」「行動管理」「モチベーション」「般化」等が挙げられた。これらの指導内容のつながりについて、今後比較検討することも重要であろう。

また、学校における自立活動の内容整理において、提案されている「社会性」に関する項目に関しては、その内容について、各教科、道徳、特別活動等の全体の内容との関連で整理することが課題となるであろう。

しかしながら、障害のある児童生徒の指導において、自立活動は重要な領域であり、自閉症の児童生徒の指導においても、その特性に応じた内容が自立活動の解説書等において適切に記述される必要がある。

なお、自立活動の五つの区分について、自閉症の特性を考慮して、新たなその区分を追加するという意見もあるが、慎重な検討が必要であろう。

3. 領域・教科を合わせた指導

自閉症の特性に応じた指導の形態の開発研究としては、国立特殊教育総合研究所が提言している「個人別の課題学習（仮称）」や東京都が提言している「社会性の学習」があり、これらは領域・教科を合わせた指導として位置づけられていた。

また、イギリスの学校では学びやすさだけでなく、般化の難しさを考慮して、「統合した指導（Integrated Schemes of Work）」が重視されていた。これは、我が国における領域・教科を合わせた指導である「生活単元学習」等と類似した形態であろう。

領域・教科を合わせた指導は、個々の自閉症の特性に応じた指導目標・内容を具体化し、学習形態としての個別指導や小集団による指導などの集団構成や単元・題材等の学習活動のまとめ、学習環境に十分に配慮した指導が有効であると考えられる。

これらの指導上の効果については、これから実践的検証が行われようとしている段階であり、今後、授業としての具体化と実践に基づいた分析が必要で

あろう。

4. 授業改善のための個別の指導計画の充実

－自閉症教育のキーポイントの活用－

自閉症の特性に応じた教育課程を編成し、実際の授業に展開していく上で鍵となるのは、個別の指導計画である。個別の指導計画に基づく授業の目標設定、指導内容・方法の選択が課題となる。

国立特殊教育総合研究所は、この授業改善の観点として「学習する態勢になる力」「指示に応じる、指示どおりに行う力」等の「自閉症教育のキーポイント」を提案している⁹⁾。

イギリスの学校では、「学習することを学ぶ」こと、「学習することを可能とする」ためのスキルが重視されていた。

これらに共通する点は、教科等の内容を学ぶ際に必要な力であり、「わずかの時間、いすに座る」等の学習上の基本的スキルである。また、自閉症の子どもにとって、これらは、年齢を重ねる中で、自然に身につけることが困難な力という点も共通である。

これらの力については、適切な指導計画や指導方法を工夫する中で、『期待されていることを理解し』たり、『より適切なルーチンを身につける』ことが重要となる。

自閉症の特性に応じた授業の改善においては、このような自閉症教育のキーポイント等を活用することが鍵となる。

5. 教育課程チェックリスト、個別の指導計画チェックリスト

プロジェクト研究「養護学校等における自閉症を併せ有する幼児児童生徒の特性に応じた教育的支援に関する研究」の研究成果^{5) 8) 9)}及び本稿における自閉症の特性に応じた教育課程の比較検討をとおして、自閉症の特性に応じた教育課程の在り方について考察してきた。

表3に、これらの検討を踏まえて、教育課程と個別の指導計画を作成する際に考慮する必要がある点をチェックリスト（試案）として示した。学校の特色を踏まえつつ、その教育課程を編成する必要があ

表3. 自閉症の特性に応じた教育課程と個別の指導計画に関するチェックリスト（試案）

<p>I 教育課程について</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 児童生徒が身につけたい「生きる力」について、他の児童生徒と同じ枠組みを前提とし、自閉症の特性を考慮し、特に身につけたい力を位置づけているか。 2. 自閉症の特性を考慮して、その特性がより顕著にならないような教育課程を編成しているか。 3. 1) 自閉症の児童生徒の行動に応じた自立活動の指導を位置づけているか。 2) 自閉症の児童生徒の行動に応じた自立活動の指導内容を整理しているか。 3) 自閉症の指導のキーポイントを手がかりに、自立活動の指導計画を作成しているか。 4) 時間における指導の必要性を検討しているか、位置づけているか。 4. 1) 自閉症の児童生徒の行動を考慮して、教科等の指導において、自立活動の指導を関連付けているか。 2) 自立活動の指導を関連づける際に、指導のキーポイントを考慮しているか。 5. 1) 自閉症の児童生徒の行動に応じて、領域・教科を合わせた指導に取り組んでいるか。 2) 短い時間でも個別指導の時間を設けているか。 6. 自閉症の児童生徒の行動に応じた日常生活の指導、生活単元学習、作業学習の工夫を行っているか。 7. 身につけた行動が他の場面においても活用できる（般化）ように、指導上の工夫を行っているか。 8. 社会性を意識して、生活、社会の教科等、道徳、特別活動の領域等の指導において、工夫を行っているのか。 <p style="text-align: center;">II 個別の指導計画について</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 自閉症の定義や行動特性を理解しているか。 2. 実態把握をする際に、本人や保護者の願いや障害の特性による困難さに加えて、周囲の人や環境の情報を整理しているか。 3. 指導の7つのキーポイントの視点で、実態把握をしているか、課題設定をしているか。 4. 言語的な指示よりも、視覚的な指示が理解しやすく、視覚的な手がかりの工夫をしているか。 5. 見通しがつきやす環境を工夫しているか。 6. 情緒的な安定を前提に、より難しいコミュニケーションの手段、見通しがつきにくい状況での行動のコントロールを心がけているか。 7. 人と向き合う、人に合わせる力を育てることを計画しているか。 8. 集団の中で、他者に合わせて行動するスキルの学習があるのか。 9. 行動上の問題について相互作用モデルで理解し、解決のための取組を提案できるか。

るが、これらの点については、それを採用するか否かは別にして、学校として検討する必要のあるポイントと考えられる。

VI. 教育課程に関する課題

自閉症の特性に応じた教育課程の比較検討を踏まえ、自閉症の特性に応じた教育課程の在り方について考察した。ここでは、今後の検討課題について取り上げる。

1. 教育課程の基準に関する検討

現行の学習指導要領によれば、特殊教育に関する

学校の教育課程は、小・中学校の教育課程に準ずるとしながらも、知的障害養護学校の各教科があり、また特例により、自立活動を主とした教育課程が編成できることになっている。

国立特殊教育総合研究所（2004b）⁶⁾が指摘しているように、これらの教育課程と小・中学校の教育課程とのつながりについて、その整理を行うことが課題となっている。

そして、その報告書は、盲・聾・養護学校の教育課程の基準を共通のものにするモデル、また、可能であれば小・中学校の教育課程を基本として、盲・聾・養護学校の教育課程の基準は示さず、柔軟な運用で、特性に応じた指導を展開していくモデルを提

案して、今後の検討課題としている。

また、平成19年4月から、盲・聾・養護学校が「特別支援学校」となるが、障害の枠を越えた学校となる際に、その学校の教育課程をどのように編成するかが大きな課題となっている。

「場による教育」から「ニーズに応じる教育」に視点を変換したことを契機に、長年にわたる変遷で複雑化した教育課程の構造について、根本から見直しを行うことが大きな課題であろう。

このような教育課程全体の検討を踏まえながら、自閉症の特性に応じた教育課程をどのように編成していくが検討課題である。

2. 教育課程の評価・改善、実践の積み重ね

この数年に、我が国においても自閉症の特性に応じた教育課程に関する研究が実施され、いくつかの提案が示されてきた。

しかしながら、これらの提案はひとつの考え方であり、これからは、各学校での実践を踏まえながら、それらの教育課程を評価し、提案が妥当なものか否かの検討が必要となろう。その際には、編成・実施された教育課程の中で、自閉症の児童生徒がどのような力をつけたかの評価が基本的な情報になる。これらの評価の取組は、今後の重要な課題である。

3. 自閉症の特性と子どもの学びの基本

自閉症の特性に応じた自立活動の指導内容の整理、領域・教科を合わせた指導形態、さらに具体的な指導を改善していくツールとしての自閉症教育のキーポイントについて考察してきた。ところで、自閉症の子どもに必要な指導内容は、他の子どもの指導内容と異なるのであろうか。

このことを考えることは、自閉症の指導にとって、「自閉症の特性」「自閉症の症状」を、どのように考えるかにつながるからである。視点を変えれば、自閉症の特性といわれる行動は、ある領域の内容が学習されていない、又は誤って学習した結果として、その行動が顕著になると考えることも可能である。

つまり、学習として成立しなかった部分を再度学

習したり、学習として成立するような方法の工夫が必要になる。そのような取組を充実させることが「自閉症の特性が顕著にならないために」、また「厳しい自閉性をゆるやかに」するための指導であろう。そして、学習として成立しなかった行動の要素は、行動の基本的な要素と考えられる。

この点について、プロジェクト研究で取り上げている自閉症教育のキーポイントについても類似する議論があった。自閉症の特性に応じた授業改善の視点としてキーポイントについて、このポイントは「自閉症の特性に応じた」ともいえるし、「行動の調整が難しく、社会性が弱いことに応じた」ともいえる。また、自閉症教育のキーポイントは「すべての子ども」に対応する概念ではないかという指摘もある。これらのポイントは、人が学ぶ上で欠かすことのできない力であり、自閉症の場合には、特に学ぶことが困難で、誤って学習し易いものと考えらることで、新たな指導の手だてに繋がる可能性が高いであろう。

VI. おわりに

自閉症の特性に応じた学校教育について比較検討し、教育課程の基本的な視点と今後の課題について考察した。自閉症に関する研究については、多くの蓄積があるものの、学校教育や教育課程との関連性を検討した研究は少ない。本稿で取り上げてきた研究がこの数年取り組み始められたところである。知的障害養護学校において、自閉症を併せ有する児童生徒の割合が高い現状においては、これらの学校教育の課題について早急に整理し、解決策を提案することが求められている。このような状況で、本稿は教育課程の在り方のひとつの提案と考えられる。今後は各学校の実践を積み重ね、教育課程を評価し、改善していく中で、ここでの提案の妥当性を吟味することが必要であろう。

謝 辞

本稿は、平成15年度～平成17年度国立特殊教育総合研究所プロジェクト研究「養護学校等における自閉症を併せ有する幼児児童生徒の特性に応じた教育的支援に関す

る研究」として、取り組んできた研究をまとめたものである。この一部は、平成17年度報告書「養護学校等における自閉症を併せ有する幼児児童生徒の特性に応じた教育的支援に関する研究」に掲載されている。

研究代表者の小塩允護氏、及び平成17年度プロジェクト研究の所内分担者である廣瀬由美子氏、佐藤克敏氏、齊藤宇開氏、涌井恵氏、内田俊行氏、小澤至賢氏、その他研究分担者及び研究協力者に記して感謝申し上げる。

引用文献

- 1) 21世紀の特殊教育の在り方に関する調査協力者会議：21世紀の特殊教育の在り方について（最終報告）. 文部科学省, 2002.
- 2) 千葉県立野田養護学校：研究開発実施報告書〈第3年次〉, 千葉県立野田養護学校, 2006.
- 3) Dorchester Curriculum Group : Towards a Curriculum for All : A Practical Guide for Developing an Inclusive Curriculum for Pupils Attaining Significantly Below Age-Related Expectations. David Fulton Publishers, London, 2002.
- 4) Helen Allison School : School Prospectus 2004/2005. Curriculum, Helen Allison School, 2004.
- 5) 国立特殊教育総合研究所:自閉症教育実践ガイドブック. ジアース教育新社, 2004a.
- 6) 国立特殊教育総合研究所：「21世紀の特殊教育に対応した教育課程の望ましいあり方に関する基礎的研究」報告書. 国立特殊教育総合研究所, 2004b.
- 7) 国立特殊教育総合研究所：「21世紀の特殊教育に対応した教育課程の望ましいあり方に関する基礎的研究」報告書, 資料主要国における特殊教育に対応した教育課程の調査研究. 国立特殊教育総合研究所, 2004c.
- 8) 国立特殊教育総合研究所:自閉症教育実践ケースブック. ジアース教育新社, 2005.
- 9) 国立特殊教育総合研究所：「養護学校等における自閉症を併せ有する幼児児童生徒の特性に応じた教育的支援に関する研究」報告書. プロジェクト研究「養護学校等における自閉症を併せ有する幼児児童生徒の特性に応じた教育的支援に関する研究」, 2006.
- 10) 鳴門教育大学附属養護学校：研究紀要, 35, 鳴門教育大学附属養護学校, 2005.
- 11) Radlett Lodge School : School Prospectus 2003/2004. Curriculum, Radlett Lodge School, 2003.
- 12) The National Autistic Society : <http://www.nas.org.uk/nas/jsp/polopoly.jsp?d=132>, 2006.
- 13) 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議：特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）. 文部科学省中央教育審議会, 2005.
- 14) The Qualifications and Curriculum Authority : National curriculum 5-14, <http://www.qca.org.uk/ages3-14/232.html>, 2003
- 15) 東京都教育委員会：自閉症の児童・生徒のための教育課程の編成について. 平成17年度知的障害養護学校における自閉症の児童・生徒の教育課程の開発・研究事業報告書, 2006.
- 16) 筑波大学附属久里浜養護学校：平成17年度自閉症教育実践研究協議会, 要項及び資料. 筑波大学附属久里浜養護学校, 2006a.
- 17) 筑波大学附属久里浜養護学校：自閉症児のための教育課程の開発に関する研究開発. 平成17年度文部科学省研究開発校研究開発実施報告書（第2年次）, 2006b.
- 18) 東京都立青鳥養護学校久我山分校：国立特殊教育総合研究所プロジェクト研究協議会資料, 2006.
(受稿年月日：平成18年10月2日)

Curriculum for Students with Autism and Intellectual Disabilities: A Comparative Study of Practical Curricula in Japan and England

TOKUNAGA Yutaka*, KIMURA Nobutaka**

(*Department of Policy and Planning) (**Department of Educational Support Research)

Abstract: The purpose of this study was to examine the curriculum for children with autistic disorders and intellectual disabilities based on the NISE project research “Effective Educational Support based on the Special Needs of Children with Autistic Disorders-Focused on teaching contents, teaching methods and managing strategies of school and/or classroom environment-(2003-2005)”. The present situation and issues concerning school education to meet the educational needs of children with autistic disorders and intellectual disabilities were reviewed. The outcomes and recommendations of practical curriculum projects in special schools were summarized. As the result, educational activity to promote independence (*jiritsu katudo*) and educational methods of “Instruction combining learning areas and subjects (Integrated Schemes of Work)” were pointed out to need to be discussion. In addition, educational practices in schools for children with autistic disorders founded by The National Autistic Society, England, were introduced. As a result of this comparative examination of the curriculum for children with autistic disorders and intellectual disabilities, the following discussion points were recommended: 1. rethinking of curriculum for children with disabilities, 2. improvement of educational content to promote *jiritsu katudo* and educational methods of integrated schemes of work, and 3. basic concept of learning and improving daily lessons.

Key Words: Autism, Curriculum, Activities to Promote Independence, Integrated Learning Areas and Subjects, Individual Task Learning

